HABITAT NEWS

VOLUME 38

Habitat for Humanity® Japan

国内居住支援プロジェクト

プロジェクトホームワークス始動

（PHW: Project HomeWorks）

4月16日中野区内で活動案内配布、地域のニーズ調査を行った学生たち

今春より、ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン（ハビタット・ジャパン）は、日本国内における居住の問題に取り組むべく、新たに国内居住支援プロジェクト**「プロジェクトホームワークス（PHW: Project HomeWorks）」**を立ち上げました。PHWの活動では、私たちの身近で住まいの問題を抱える方々に対して、以下の2本の柱を立てて支援を展開していきます。

①今ある住まいを守る

年齢、体調、家族構成の変化に伴う生活スタイルの変遷で、これまでの住まいが安心・安全に暮らせる場所ではなくなることがあります。このようなライフステージの変化に対応するため、行政でも様々な社会サービスを提供していますが、適切な利用まで至らず、高齢者や障がいのある方、ひとり親家庭などの中には、十分な居住環境を実現できていない人がいます。この溝を埋めるべく、ハビタットはボランティアや建築士のご協力を得て、住宅のほころびの修繕、簡易的な家具の耐震・補強を行うほか、一人では大変な家の片付けや掃除の手伝いなどに取り組み、日常のお困りごとに寄り添い、安心・安全に暮らせる居住環境を守ることに取り組みます。

②新しい住まいへつなげる。

様々な事情により住まいを失いかけている人、もしくはすでに住まいを失い路上生活を余儀なくされている方たちの困りごとに寄り添い、よりよい住まいや新しい住まいへつなげていくことを目指します。路上生活を抜け出し、アパートへの入居を目指す方、高齢の方、ひとり親家庭、障がいのある方などは、賃貸住宅への入居を断られやすい傾向にあります。しかし高齢で独居の身寄りのない方へ、第三者による定期的な見守りがあることで入居を受け入れられ易くなるケースもあります。いろいろな方法を模索しながら、ハビタットは社会的に脆弱な立場に置かれた方々への住まいの入居をサポートし、入居後も関わり続ける支援を構築していきます。

◆ PHW 近況活動報告 ◆

中野区を拠点に、ニーズ調査を始めました

PHWの連携団体である、東京都内のホームレス支援に取り組む「つくろい東京ファンド」が拠点とする中野区の沼袋を中心に、地域のニーズ調査とプロジェクト実施の案内配布を開始しました。

片付けを行うAさんと学生ボランティア

その第一回目となる調査を4月16日に実施。快晴に恵まれた少し汗ばむ陽気の中、キャンパスチャプターに所属する14名の学生と共に、沼袋と江古田地域周辺を歩き、約500世帯に案内を配布しました。

中野区在住の男性Aさん（80歳） ニーズ調査から3日後、お一人で暮らす高齢の男性から支援の相談が入りました。80歳という年齢に加え、体調の悪化から、自宅の片付けに手が回らないということでした。早速お宅を訪問し、ニーズの聞き取り調査を実施したところ、Aさんは長く住んでいたお宅に愛着を持ち、ご家族を亡くされてからもお一人でご自宅を守って暮らしてきたとのこと。しかし、室内は足の踏み場がないほど物が溢れかえり、適切な居住環境とは言えない状況でした。ハビタットでは、一日も早くAさんが安心して過ごせる住まいを取り戻す必要があると判断し、支援の実施を決定しました。6月には学生ボランティアを動員し、片づけ・掃除を行いました。学生からは博識なAさんとの交流を喜ぶ声も聞かれ相互に実りあるものとなりました。

つくろい東京ファンドの建物を修繕します。「つくろい東京ファンド」は、路上生活者が新たな住まいを手に入れる支援を行っています。これまで約40名が、同団体が運営する個室のシェルターを通じて、住まいを見つけ、地域住民として暮らしをリスタートしました。シェルターは、新しい住まいへの入居を目指す方にとって、心身を静養し、生活を安定させるための大切なステップです。この度、そのシェルターの修繕をハビタットが担うこととなりました。建築士や、企業や学生ボランティアによる協力を得ながら、老朽化したシェルターを安心して生活ができる住環境に修繕していきます。

プロボノ大工さん、建築士さん、募集中です！

熊本地震から1年～学生が被災地をめぐる～

熊本地震から1年が経過した4月22日、キャンパスチャプター（CC）の学生9名が、熊本県阿蘇郡西原村を再訪しました。参加メンバーはCCを対象に実施した“災害マニュアル作り”コンテストで上位に入賞した3団体の学生代表。熊本地震を振り返り、今後起こりえる災害に学生組織として迅速に対応する体制作りを目指して、マニュアル作りコンテストを実施しました。代表学生は1年が経過した被災地を歩いて回ったほか、ハビタットが立ち上げのきっかけとなった木工ものづくりを通して仮設住宅の住環境改善に取り組む団体「木もくプロジェクト」の活動に参加。地元の方から当時の、そして復興に向けたこの1年の歩みを伺うことができ、学生たちは災害発生時の被害を最小限に抑え、復興に向けた地域力を育むには、日ごろからの地域住民の交流がいかに大切かを学ぶことができました。再訪問を快く受け入れてくださった西原村の皆さま、ありがとうございました。

ミャンマーでも家を建てる　GVチームの受け入れを開始

2月、ミャンマーで初めて海外建築ボランティア（GV：Global Village）チームの受け入れが開始されました。ハビタットは、2008年に発生したサイクロン被災者への緊急支援を契機に支援を開始。当初はパートナー団体と協働で支援を展開してきましたが、2014年に政府より認証を受け、ハビタット・ミャンマーが設立されたのを機に支援をより本格化させました。ミャンマーは2011年の民政移管を受けて、急速な経済成長をとげつつあるものの、未だ4人に1人が貧困状態にあると言われています。統計では、住宅の80%以上が耐久性の乏しい木材や竹で作られ、28%もの人が安全な飲み水へのアクセスがない状況に置かれています。こうした現状を受け、ハビタットは主要都市ヤンゴンから車で2時間ほど離れたバゴ地区で、災害に強い住宅の建築と衛生環境の改善に向けた新プロジェクトを立ち上げました。この活動は、長年のグローバルパートナーである日産自動車からの資金のサポートを受け、各国からのGVボランティアと共に1,000世帯への居住支援を目指しています。アジア全体で最も多くのGVチームを派遣するハビタット・ジャパンに寄せられる期待は高く、世界初のGVチームとして、日本全国のキャンパスチャプターから16名の学生が集まり、バゴで建築活動を行いました。

伝統的な素材を生かしつつ、土台や屋根を強化された家。

クラビで住宅建築支援を行ったGVチーム

タイでGVコミュニティ支援を開始

ハビタット・ジャパンは、昨夏よりタイ南部クラビ県アオール郡バンバガンでのコミュニティ支援を実施しています。バンバガンは多くの観光客で賑わう市街地を抜け、車で30分程北西に向かうと現れる、約450世帯が暮らす河口の村です。2004年に発生したインド洋大津波では人的被害は免れたものの、村の主要な収入源である漁業の道具が大量に流されるなどの被害を受けました。そこで女性たちは漁業以外での収入を確保するために染物（バティック）を始めました。被災から10年以上たった現在は、魚の棲家であるマングローブの減少が進み、漁業での収入は安定していません。女性たちは現在も観光客向けのバティック作りを続けていますが、十分な収入源になっていないのが現状です。子どもたちの多くは中学を卒業すると、家計を助けるために親の漁業を手伝います。住まいを改善する余裕はなく、潮風にさらされ脆い状態にある家が村には点在しています。2004年に住宅支援を開始した当初、20世帯を越える家族から支援要請を受けました。現在では、100世帯を越える家族がハビタットからの支援を待っています。ハビタットはこうした現状を受け、これまでの海外建築ボランティア(GV)チームの派遣に加え、初めてのコミュニティ支援を行い、収入の確保や衛生教育を通して更なる住環境の改善にあたり、様々な村の課題に取り組んでいくことを決定しました。日本からバンバガンへ初のGV派遣となった今春、4つのGVチームが建築支援を行ったほか、バティック作り、マングローブの植林活動などもお手伝いしました。

目指すべき世界を若者と築く　～「持続可能な開発目標」の実現に向けて　～

「持続可能な開発目標(SDGs)」は世界の貧困を撲滅し、持続可能な世界を実現するために2015年の国連サミットで採択された国際目標です。世界の貧困撲滅に向けた住宅支援に取り組むハビタットでも、SDGs目標達成に寄与するため、4月末ジャパン・リニューアブル・エナジー株式会社(JRE：Japan Renewable Energy Corporation)と連携し、SDGsへの理解を若者に図る取り組みを実現しました。JREは国内で再生可能エネルギーの発電事業を通じ、CO2削減に貢献している、再生可能エネルギーのリーディングカンパニーであり、SDGs達成に積極的に取り組む企業です。JREと協働で、再生可能エネルギーとその将来性について、若者の理解を育む研修をJREの風力発電所のある宮崎県五ヶ瀬町で実施しました。

研修に招待されたキャンパスチャプターの学生9名は、風力発電を視察し、再生可能エネルギーを必要とする背景や再生可能エネルギーの仕組みをJREの方から学んだほか、地元の宮崎県立五ケ瀬中等教育学校に通う高校生9名と交流し、「エネルギーの必要性と私たちにできる取り組み」をテーマに意見を交換し合いました。意見交換では「まずは身近なところからでも地球の問題について自分自身で考えることを始める」といた意見から、SDGsの達成に向けた具体的なアイデアまで様々な意見が飛び交い、世界が取り組むべき課題について明日を担う若い世代が真剣に考える機会となりました。

継続的な支援を目指すハビタットでは、若者の育成に長年取り組んでいます。世界を牽引するユースリーダーの育成に、今後も尽力してまいります。JREの皆さま、ご支援ありがとうございました。

児童養護施設でボランティア　～企業による地域貢献をサポート～

ハビタット・ジャパンは、これまでいくつかの児童養護施設にて住まいの環境改善の活動を行ってきました。今回はその中でも最も大きい施設である、北区赤羽にある星美ホームでの活動となりました。星美ホームは、広大な敷地を擁し90名以上の子どもたちが暮らしています。しかし建物は1960年の建設で、老朽化が進み管理やメンテナンスに困難を抱えていました。子どもたちの暮らしの場の環境改善は必要ですが、実現するにはたくさんのマンパワーを必要とします。そこで、ハビタット・ジャパンとプロロジス社の連携支援が計画されました。物流不動産のリーディング・グローバル・プロバイダーであるプロロジス社は、2013年より毎年5月に“IMPACT DAY”と称して、世界中で全社をあげて地域に貢献するボランティア活動の日を設けています。今年は5月19日に、プロロジスおよびプロロジス・リート・マネジメント社員の計103名が参加し、汚れや傷みが目立つ内壁・外壁のペンキ塗り替え、錆びついた遊具の塗装、敷地内の草むしりや樹木の剪定、建物全体の窓の清掃、排水溝の清掃などを行いました。ボランティアの皆さんの卓越したチームワークにより、ほぼすべての活動を無事終了。作業後にちょうど子どもたちが帰宅する時間となり、準備していたおやつを配り交流することもできました。関わったすべての人にとってインパクトのある一日となったようです。

Habitat Young Leaders Build 2017

4月22日、約半年間にわたって世界の8人に1人が適切な住まいを持てない現状を若者が社会に訴え、ボランティア活動に取り組んできた「ハビタット・ヤング・リーダーズ・ビルド(HYLB: Habitat Young Leaders Build) 2017」が閉幕しました。昨年の12月5日の国際ボランティアデーを皮切りに開催された今年度のHYLBには、アジア太平洋地域の16カ国と1地域の若者が参加し、各国で若者による様々な取り組みが行われました。アジア太平洋地域で最大のキャンパスチャプター(CC)をもつ日本では、2月・3月の2ヵ月間で過去最多となる598名もの若者が健全な住まいを必要とする家族の待つ国々へ赴き、海外建築ボランティアに参加しました。更に、国内では、CCが担う役割の一つであるファンドレイズに各地で取り組んだほか、若者の関心を呼ぶ動画を制作し、CCメンバーのネットワークを生かしてSNSで広げ、世界の現状を訴える新たな取り組みにもチャレンジしました。CCが手を取り合い、ハビタットの理念である「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現へむけたアクション、これからどう発展するか楽しみです。

ハビびと

上坂 和代（こうさか かずよ）さん 日本ヒルティ株式会社

建設用の工具・材料を製造・販売するグローバル企業、日本ヒルティ株式会社（ヒルティ）でCSRを担当する上坂和代さんは「一過性の活動ではなく、継続性を大切にしています」とヒルティのCSRで大切にする考えを教えてくれました。東日本大震災の発生を機にCSRの職に就いた上坂さんは「CSRという言葉が社内で頻繁に使われるようになったのはここ数年です。社内の広報に力を入れる一方、社員を巻き込むCSR活動で意識改革に取り組みました」とこれまでを振り返ります。

ヒルティとハビタットの協働が日本で実現したのは東日本大震災の復興支援が始まりです。世界のヒルティから義援金が日本に集まり、その資金を使って被災者支援を行うパートナーとして、グローバルでも協働実績のあったハビタット・ジャパンが選ばれました。2012年にハビタットが岩手県で実施したソーラー発電の設置を支援して以来、東北の被災地でヒルティとして初めてボランティア活動を実現した上坂さんは、「継続性を大切にする」と話すように、CSRの一環として今もハビタットの取り組みを応援してくれています。ハビタットを協働パートナーに選ぶ理由を伺うと、「ヒルティが掲げる『より良い未来を築く』という企業理念に対し、ハビタットは何をすべきかがとても明確です。ハビタットは『家』を建てることで、家族が豊かな未来を築けるようお手伝いしていて、一過性ではない継続性のある活動にとても共感しています」とヒルティがハビタットに抱く思いを明かしてくれました。

東北の復興支援と並行し、2014年には新たな協働が実現しました。日本から海外の住宅建築支援地に赴くボランティアの活動を支えるために、建築現場における安全管理講習を年に4回行うことになりました。「現地で家を建てるボランティアを応援することで、間接的ですが家の建築をお手伝いできていると思いますし、海外の問題に目を向け、熱心に取り組む学生ボランティアの姿は社員を刺激し、とても良い影響を与えてくれています」と社員のモチベーション向上に繋がっていると教えてくれました。

一方、社員の巻き込みにおいては、参加人数が限られているので課題が残ると話す上坂さんは、新たな取り組みを模索していると言います。その一つが、今春ハビタットが立ち上げたばかりの国内居住支援「プロジェクトホームワークス」の現場に社員ボランティアを派遣し、住宅の修繕に取り組むことです。社員の専門性を生かせる活動は参加のハードルが低く、社員を巻き込みやすいことから、年内の実現に向けて調整しているそうです。

「より良い未来を築く」ために社員と共に取り組むヒルティの社会貢献は、今後も益々広がりを見せてくれそうです。

日本の若者が国際賞を受賞

住宅支援活動に関わるキャンパスチャプターの多大なる貢献が評価され、日本のキャンパスチャプターがハビタット国際本部より最も貢献したボランティアに贈られる「ネヘミヤ賞」を受賞しました。

「ネヘミヤ」とは、キリスト教の聖典であるネヘミヤ記に登場する、神の導きと卓越した行動力で人々の心を動かし、困難な地域の再建を果たした人物です。自主運営された学生組織である日本のキャンパスチャプターは、海外建築ボランティアプログラムへの参加に留まらず、大学キャンパス内や地域で募金活動や社会的な啓発活動に精力的に取り組んでいます。結果、若者による支援の輪は広がりを見せ、ハビタット・ジャパンはアジア太平洋地域の中で最も多くのボランティアを海外の支援地に派遣するまで成長しました。

こうした日本の若者による活動は先進的であり、明日の社会を担う若者が、今日の世界においてリーダーの役割を果たしているということが高く評価され、「ネヘミヤ賞」の受賞となりました。

若者の参加で変えられる未来があります

ハビタットの理念に賛同し、自主運営のもと活動する学生団体を、キャンパスチャプター（CC）と呼んでいます。日本のCCはアジア太平洋地域内で最大規模を誇り、日本全国の37大学キャンパス、2,500名のメンバーが活動しています。本年2月には、関西外国語大学に新設され、夏の海外建築ボランティア活動に向けて、準備を進めています。代表を務める有馬悠河さん（写真上段左から2人目）は、「まだ設立したばかりですが、他のCCの協力を得ながら、関西外大ハビタットの基盤を作っていきたいと思います。海外のボランティア活動だけでなく、地元地域のボランティアにも挑戦していきたいです」と意気込みを語ります。ハビタットでは、こうした若者の取り組みが、未来を築く人材の育成に繋がると考え、CCに様々な育成機会を提供し、彼らの活動をサポートしています。 CC参加・設立に関心のある学生の皆さんは〈yp@habitatjp.org〉までご連絡ください。

編集後記

梅雨の候、いかがお過ごしでしょうか。今号の表紙でお伝えした国内プロジェクトは、海外での支援活動同様に、「住まい」を生活の基盤ととらえ中野区内から活動をスタートさせました。連携団体であるホームレス支援を行う「つくろい東京ファンド」は「生活保護」の申請の支援をし、新しい住まいへつなぐ活動もしています。その申請のお手伝い等もさせていただいています。「生活保護」は、健康で文化的な最低限の生活を送る国民の生存権を保障するセーフティネット（安全網）です。日本の社会保障制度は、様々なシステムを構築しているようです。それでは、なぜ貧困や生活困窮がなくならないか。それは、システムの間にはまだ隙間があるうえ、それをうめるセーフティネットが適切に機能せず、制度の隙間にこぼれおち、暮らしが困窮する人がいるからです。私たちハビタットは、国内でも安心・安全な「住まい」を失う人を一人でも減らし、今ある「住まい」を守る活動を継続してまいります。

ハビタット・フォー・ヒューマニティは住まいの問題に取り組む国際NGOです。

特定非営利活動法人ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン

〒160-0022
東京都新宿区新宿5-11-25 アソルティ新宿5丁目301
Tel: (03) 6709-8780　Fax: (03) 6709-8787
Mail: info@habitatjp.org　Website: www.habitatjp.org

Habitat for Humanity® Japan